

---

# 十三刻

りょく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三刻

### 【著者名】

りょく

N75730

### 【あらすじ】

魂の行先は12の扉に分けられる。

そしてもう一つ、13番目の扉に案内される魂とは・・・。

## 壱ノ刻 一縁

『ここから逃げよう……』

「でも。

『もう向こにも縛られることは無いんだ！』

「でも・・・そうしたら僕達は・・・。

漆黒の闇の中、一つの手が冷たい鳥籠の中にいた僕に差し出される。

『さあ一緒に行こう』

躊躇いはあった、恐怖もあった、不安もあった。  
けれど僕はその手を取ってしまった。

そして僕達は闇の中から抜け出した・・・。

それはそう・・遠い・・昔の話・・・。

まだ僕が冷たく狭い鳥籠の中の事しか知らない時の事・・・。

「ボタツ・・・。

真つ暗な漆黒の闇の中・・何処かで響く水の音。  
遙か上空で輝く淡い光がその正体を露わにする。  
白い肢体が宙に浮かび、肢体に絡みついた黒い鎖・・無数の傷口か  
らは鎖を伝い鮮血が滴り落ちる。

漆黒の闇の中なのに、鮮血の赤は異常な雰囲気を出していった。

その中に佇むのは、体を覆うほど のフード付きの黒いコート。そして光に輝くのは銀髪だった。下を向いていたその人物が気配を感じ、顔を上げると・・・透き通る様な青い瞳を持つまだ幼い少年だった。

『・・・次の仕事だそ、うだ』

氣配はそれだけを伝え氣配を消した・・。

少年はゆっくり瞳を伏せてから同じようにゆっくりと目を開けると、先ほどまでの青い瞳ではなく・・闇の様に黒い漆黒の瞳になっていた。

ゆっくりと立ち上がり、手をかざすと一つの古びてはいるが重厚で冷たい感じのする扉が出現しその 中に入る。

・ポタッ・・・・。

誰もいなくなつた闇に、ただ鮮血の落ちる音だけが響いた・・・。

「お前いい加減にしろよな！？」

路上で争う男女を周囲の人物は見て見ぬふりをする。女は殴られその拍子に壁に頭をぶつけても誰も周囲の人は止めるようには言わない・・。

「お前みたいなのが相手するわけないだろ！？」

男は頭をぶつけ呻く女を冷たく見下ろしその場を去つた。一人残された女は痛む体を抱えて立ち上がりつとしたが足下がよろけてしまい・・。

「・・あ・・・・すっすみません」

その場に倒れそうになつた女を学生服を着た少年が支えてくれた。

女は頬は赤く腫れ、手や足にも青い痣が痛々しく残っていた。

「・・病院、血出でるし」

「え・・あ、大丈夫です・・・それじゃ」

女はよろけながらも少年の言葉を断り、家路に着いた。

その次の日だった、テレビのニュースで死体が発見されたと。公開された写真の女は昨夜会った女だった。

「あの女死んだんだって？お前やつたのかよ？」

煙草の噎せ返るような店の中、派手な頭にピアスをじゅらじゅらと付けた男達が面白そうに話す。

「やつてねーよ、あの女が勝手に死んだだけだろ？」

そう答えるのは昨夜女を殴つていた男だ。

「でもさあの女、金ヅルに良はかっただんけど・・まあそれ以外は最悪つてやつ？」

そう言って何でもないかのように冗談を言つて笑う男達を見つめるのは・・一つの影。誰にも見えてないようでの影が動いても・・そこにいなかの様に誰も反応しなかつた。

男が連れと別れ一人路上で座り込んでいると、あの女のニュースが街頭テレビに映される。それを見て男は舌打ちをして、煙草に火を付けようとした時・・。

「お前、死ぬよ」

いつの間にか目の前に立つてた学生服の少年がそう言った。少年は見たことも無いほど整った顔立ちをしていたが、それ以上にビックリ他の人とは違う雰囲気を纏つていた・・。

「何だよガキ？死にたいのか？」

男は変な事を言う少年の襟を掴み睨むが、少年は何とも感じないよ

うに無表情のまま男を見つめる。

「もう一度言う、死ぬよ・・近い内に」  
あまりの気持ち悪さに少年を突き飛ばし、男はその場を走って逃げた。少年が怖い訳じゃなくて・・ただ不気味だった。不気味としか言いようがないほどに・・。

「何だよあのガキ・・ヒツ!」

足を止め、後ろを振り向くと顔が当たるほどの距離に黒い影がいた。不気味にやらやらと揺れるその影は、段々と形を作り人間の影の様になる。

「氣持悪い! 何だよ! - - -

男はそのまま一目散にその場から走り去った。影が追つて来そうなため、後ろを振り返らず自分の家に帰り鍵を掛ける。それから男の周りでは家中までは現れないが、外で気が付くと影はそこにいた。男は仲間たちに言つたが、誰も信用せず・・途方に暮れいた。

「これが最後の宣告かな・・・」

「あの影とか全部お前がやつたのかよ! - - - どういっつもりだ! - ?」現れた学生服の少年に怯えながらも、恐怖心で叫ぶ。

「ほんとに解らない? - - あれが何のためにいるのか」

少年の目線の先にいたのは、人間の形をした影だった。やらやらと動きながら男へと近づき・・男が逃げようとしても両足には影の腕が絡みつき、ただ恐怖心で震え叫ぶ。

男に近付き、まとわりつくように多い被つていく。男の絶叫が響き、影が男の首を絞めていく・・。

「本当にいいのか?」

影に一言聞いた少年に、影はどんどんと本来の姿に戻り・・以前に会った女の姿に戻る。女は悲しそうに頷いて、もう声が出ない口を

ぱぐぱくと動かし・・。

『・・ありがと』

と言つたように見えた。その後、女の影は男がバタバタと暴れるのをジワジワと締め続けしばらくすると男は動かなくなつた。動かなくなつた男を影は覆い尽くしすべて闇に溶けていった。

「止めるひことなんてできへんつて」

頭上から声が聞こえ、少年が振り向くと漆黒のフード付きのマントを着たまだ幼い少女が自分を見下ろしていた。

身軽にビルの上から飛び降り、軽いトンシと言つ音とともに地面に降り立つ。月夜に照らされた姿は、薄いピンク色の髪に大きく黒い瞳、白い肌の少女だった。

「まああんたの仕事やし関係ないけど、あんまり反抗しない方がいいんじゃない?」

少年が闇に溶けた場所へ行くと、黒い灰が少しだけ残つていた。それを掴み地面を軽く蹴るとふわっと体が浮き、そのままビルの上へと移動する。

もうすぐ春だがまだ夜の風は冷たい。少年は握っていた手を開くと黒い灰が舞い散る。

「ほんま、不器用やな」

その様子を見ていた少女はそう苦笑混じりに眩いで闇の中に消えた。少年はしばらく灰が舞つた場所を見ていたが、バサツと言つ音と共に先ほどの少女と同じようにフード付きの漆黒のマントを着ていた。

「・・・・・」

その次の日のニュースの中には、男の変死体が見つかったというの  
があげられていた。恐ろしい形相で自分の首を搔きむしるようにな  
て死んだと言うことだった。

暗い闇の中、扉の閉まる音が一つ聞こえると暗闇だった場所にスペ  
ットライトの様な光が数本さす。

光の中には一人ずつ立ち、全部で12人の人物がいた。その後ろに  
は扉が人数分あり、個々に独特の作りと雰囲気があった。

『今回集まつた理由はもうご存じかと思うが、その件について継続  
して行つて欲しい』

一人の人物がそういうと、反論の声がないためそのまま話は淡々と  
しばらく続き、散<sup>サン</sup>と言つと光は消え真っ黒な闇に戻つた。

そこにさつきは姿を見せなかつた人物が現れる。その少年の後ろに  
は同じく先ほどまで見えなかつた一つの扉があつた。

闇の中には先ほどの少年が一人音もしなほどの静寂の中に立つてい  
た。

足下を見ると波紋が見えるが水ではなく、鏡に映る絵の様だ・・。  
その中を見ていると昨夜の男と女が闇へと飲まれていく姿が見える  
・。

男は絶叫し憔悴仕切つた表情だが、共にいる女はやつれ髑體の様な  
姿になつてはいるが表情はひどく幸せそうに見えた。

少年は知つている。

彼らが行き着く先を・・そこは想像もできないほど地獄への道。

愛していた恋人に裏切られて殺され・・それでも尚、彼の事を愛していた彼女はどうとう闇に魂を売ってしまった。彼女の願いはただ1つ、恋人と一緒にいたかったと言うだけ・・けれどその思いは通じることなく・・。

「今ならまだ間に合ひ」

説得しようとは思わなかつたが、どうしてもそう言つたかった・・。彼女は悲しそうな顔をしたが、はつきりと頷いた。

それを否定させることなどどうしてできようか・・。

結果、彼女は彼の全てを手に入れた。そして願い道理一緒にいることができるだろう・・ただその世界は魂の輪廻などあり得ない、魂が終わりを告げるまで繰り返される苦痛だけの地獄。

少年がそつ思つてゐる内に、2人は完全に闇の中へ消えていた。

少年は頭から被つていたフードを脱ぐと、黒かつた瞳が青になり、髪も銀髪へと戻つていく。

彼は13番目の魂の門番。担当するのはもつとも重い罪を背負つた魂。

彼が門番なり長い時があつたが、未だに人の心は解らない・・。

少年が宙に手をかざすと扉が現れる。その扉をくぐり少年が立ち去つた後の闇の中には一滴の水音が響いた・・。

- ポタツ ・・。

> > N e x t

## 式ノ刻 メール

「え～あんただからバカなんだよ  
「そりそり死んじゃえばいいのに～」

毎日繰り返される嫌がらせ・・他の子や先生にはふざけていふように見えるんだろうけれど・・もつ私はこれ以上耐えられない。

「ねえ何つまんなそうなの?せっかく仲間に入れてあげてるのに「  
口調はいつも明るくて、笑顔で近付いてくるけれど・・・本当は解  
つてる。

いつも一人でいる私を可哀想とか勝手に思つて、勝手に自己満足で  
やつているだけのこと。私をからかって遊んでいるだけなんじょ・  
・。

「知花ちが、先生呼んでるよー。」

声を掛けてきたのは、同じクラスメイトの望月香もちつきかおり。小学校から同じ  
学校だけれど特に仲がいいというわけではないが、時折こうやって  
この場から離れられる理由を作ってくれる。

でも・・もう誰も信じられない。だつてこの子だつて本当は自分が  
いい子だと言うことを見せたいだけ・・。

今、この場から逃げられたとしても明日、明後日、明々後日・・永遠  
遠とこれが続くんだ。

家に帰つてからも両親は離婚して、誰もいない部屋に一人での生活。  
机に置かれたお金・・それさえ渡しておけばいいと思つての親にも  
怒り以上に呆れを感じる。

もつどうだつていい・・。  
みんな死んじやえばいいのに・・・。

・ ピピピッ。

携帯の着信に少し驚いたが内容は解つてない。「はい」と短く電話に出る。

『あつ出た、これから出てきなよ。いいもの紹介するからさ～』

昼間の連中からの呼び出し電話。これを無視すると明日の嫌がらせのレベルは上がる。別にこれ以上されてももう何も思わないけれど・

・取り合えずその場所まで行くことにした。

「遅せーよ」

そこには優秀な学校の生徒ではなく、けばけばしいメイクに服を着た連中がいた。学校の先生が良い生徒と言つてもそれはあくまで学校内の事で・・外で何をしてるかなんて関係ないんだ。

「あんたにいいもの紹介してあげる、これなんだかわかるよね」

目の前に見せられたのはいわゆるドリックグ・・私を薬づけにでもしたいのか・・。

「知花！ねえ帰ろう！」

何処で知つたのか、望月香が現れ私の腕を掴む。

「ちょっと望月さんどうこうつもり？今、私たち遊んでるんだけど？」

「遊んでるって・・それ薬でしょ！？知花はそんなことしない」連中は面白そうに望月香の回りを囮もつとした。本当なら関係ないのに私は思わず。

「あんたには関係ないでしょ、帰つて・・」

連中は私の言葉に少し驚いたようだつたが、一人から薬を奪い取つて吸うと面白そうに話し始めた。

それを見た望月香はその場から走り去つてしまつたが、私は不思議

とほつとしたのだった。

それから毎日毎日続く連中からの嫌がらせ・・だけど、私が気がなったのはあれから望月香の姿を見なくなっこったこと。

学校は二二二日姿を見なくて・・家へ行つてみると泣きはらした顔で母親が出てきた。理由は二二二日間、家に帰らず電話にもでないと言つことだつた。

私の頭の中に嫌な想像が駆けめぐる・・けれど、自分には関係ないつて言い聞かせて・・次の日だつた・・ニュースでは・・。

『今朝未明に散歩中の男性が、林の奥で変死している都内の高校に通う望月香さんを発見。死因は違法ドラッグによるもので、死亡する前に暴行をも受けているとの事です。』

すぐにはそれがあの望月香なのかということを理解できなかつた。その後すぐに望月香の家に向かつと多くの報道陣に囲まれ、とても話を聞くこと何できなかつたがニュースの望月香だつたということは確定だつた。

帰ろうと思つたとき、連中の姿が見え私はその後を着いていくことにした。

行き着いた場所はいつものたまり場で、そこで聞いてしまつた・・。

「いい氣味だよね～自分のことでもないのに出しあばつてさ」

「ほんとほんと、でもこの写真やっぱいよね？燃やしちゃおうか」  
数十枚は有るだらう写真を懐からだしライターで燃やし始めた。ほどんどうを燃やし終わると連中は楽しそうに外へ出かけていった。

私はいなくなつたことを確認してその場に行くと・・見る影もないほど青白い顔に腕には無数の注射針の後・・そして・・。

どうしてだらづ・・どうして私じゃなくて・・。

しばらく自宅でそんなことが頭を巡り、いつの間にかたどり着いたのは望月香の家で・・ちょうどお通夜の準備をしている所だった。

「知・・花? お前どうして・・そうか、香と同級生だもんな」

「・・お父さん・・どうして・・」

離婚前色々と喧嘩をしていた両親の話なんてろくに聞いてなかつた。けれど確かに起こせば、愛人に隠し子がいたとか・・まさか・・。

「お父さん・・あの子って私の・・・?」

「ああ、お前の姉妹だよ・・・どうしてあの子が・・・」

頭が真っ白になつた。そして心臓が壊れるくらいの早さで波打つ鼓動。

こんな事があるなんて・・・。

『契約をするか?』

そこに現れたのは真っ黒なマントを頭から被つた人物。本来なら怪しい人だけで終わるのだが、その独特な雰囲気は目を引く。

「私の願いを叶えてくれるの? 叶えてくれるなら何でもする・・例え地獄に墮ちても」

『永遠の苦痛でもか?』

どうせ生きていても、何度も生まれ変わつてもこうなら・・もう生きることになんの意味もないし、私はあの連中を許すこととは出来ない。私は迷わず契約をした。

「キヤハハ、ニュース見た? あの親父チョーつける!」

「でもさ~また新しいやつ見つけないと面白くないよね~」

連中が溜まっている所へ私は包丁を持ち近づき、近くの奴を刺した。それを見て他の連中は叫び声を上げ、近くにいた男達が鉄パイプな

どを手に持ち向かってきた。

私は叩かれた所が無いという位叩かれ、血が出たが・・包丁を振り回し出来るだけ斬りつけていった。

「こいつやばいよ！・さつさと殺してよ！・！」

一人が叫ぶと一人の男がナイフを私の胸に突き刺した。どくどくと流れ出る血で服は真っ赤に染まるがなおも包丁を持ち振り回す。

「何で死ないの！？こいつどうなつて」

次の瞬間部屋の明かりが消え、地中から黒い人型の影が何体も現れる。それを見て男達は逃げざり連中だけが残された。

「何これ！？やめてよ！謝るから！・！」

『謝つてどうなるの？・・香は・・もつ・・』

私がそう叫ぶと、影が一斉に連中に襲いかかった。

部屋の中は叫び声と苦しみもがく悲鳴だけがしばらく続き・・その後私の意識と共に闇の中に吸い込まれた。

『今日のニュースです。また都内で変死体です。若者よく集まるというクラブで女子高生5人が志望しているのを店の店主が発見しました。詳しい内容はまだ不明ですが・・少女らはお互いを刺し合いをしたかのようで、周囲にドラッグがあつたこともあり錯乱状態で互いを刺したようだと・・・』

連中の葬式は合同で行われたが、学校の生徒は皆信じられないと言っていた。

私はそれを遠目で見た後、望月香が捨てられていた場所へ華を供え目をつぶり、次に目を開けると真っ暗な闇の中だつた。

手足は黒く錆びた鎖に繋がれ身動きは取れない。そして目の前には前に会つた黒いマントを着た人物。

『願いは叶えられたか・・?』

これから地獄へ行こうとしているのに、私の心は今まで感じたことがないくらい軽かった。

フードを取った人物が手をかざす。鎖が体に食い込みそのまま闇へと引きずり込んでいく・・。

フードを取った人物は自分と同じくらいの年齢の少年で、見たことがない位美しかった。

「ありがとう・・」

最後に私がそう言つと、少年は少し表情を変えたような気がしたが・・それを確認するより闇に吸い込まれた。

暗い闇の中を墜ちていくとビクビクしながらすべてが凍るほど寒さを感じる。

でも・・私は連中と一緒に喜んでだ。

願わくば・・あの子、望月香の来世が幸せでありますようこ・・。

一人残された少年が知花の消えた場所へ行くと、ピンクの携帯が落ちていた。

『今度一緒に遊びに行こう。ずっと言えなかつたけど、私達姉妹なんだし・・それじゃなくても仲良くしたいなあつて思つてて。あの子達には今から行つて話してくるから・・また明日連絡するね、お休み』

携帯の画面にはそう望月香からのメールが表示されていた。少年はそれを手に取ると携帯は灰になり闇に消えた・・。

>  
>  
>  
N  
e  
x  
t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7573o/>

---

十三刻

2010年11月9日05時19分発行